天皇と五輪の微妙な関係　開会宣言と感染懸念の「拝察」

聞き手　シニアエディター・尾沢智史　編集委員・塩倉裕

2021/7/23 15:00　　有料会員記事

東京五輪の開会式で天皇が開会宣言をする。一方、五輪がコロナ感染拡大につながらないか、天皇が懸念しているとの「拝察」も。天皇の開会宣言を、どう考えたらいいのか。

問われる現代の元首のあり方　清水剛さん（東京大学教授）

五輪憲章では、開会宣言は開催国の国家元首が行うと定められています。なぜ元首なのか。それは、**国家の捉え方**から来ていると思います。

国家元首は英語で「ヘッド・オブ・ステート」です。本来は住民の集合でしかない国をまとめるために、国家は一人の「人」で、人格を持つと考えた。人ですから「ヘッド」が必要になる。この場合は頭脳という意味より、「顔」に近いでしょう。**国家という「人」を代表する「顔」として元首という個人が必要**とされたわけです。

ある集団を「人」と見なす考え方は、教会に起源を持ちます。それが国家や会社など、様々なものに応用されるようになった。**法人すなわち「人」と見なす**ことで、大きな集団がそれ自体として動くメカニズムを感覚的に理解できたからです。

五輪の開会宣言を元首が行うのも、国家を「人」と見なす発想の表れでしょう。国として「開会を宣言します」という時、「顔」である元首が行うのは理屈としてわかりやすい。天皇は、憲法上は元首とはされていませんが、国家の意思や人格を体現できる存在として、過去の五輪でも開会宣言を行ったわけです。

憲法１条で、天皇は「国民統合の象徴」とされています。ばらばらな国民を国家という一つの人格に統合し、その「顔」として存在しているという点では、象徴天皇は本来の元首的なものに近いと言えるかもしれません。

元首の役割は対外的なものとされることが多いですが、国内に対しても、国民の総意を受け止め、表明する役割を担っていると思います。昨年の春、新型コロナが拡大している時に英国に滞在していました。国民に向け、基本的には首相が発信しますが、女

王が語りかけたことがあり、特別なできごとと捉えられました。国難に際して、国民を統合し、意思を代表して発言するという権能を、いまでも元首は持っているのでしょう。

東日本大震災直後に当時の明仁天皇（現上皇）が出したビデオメッセージや被災地訪問は、まさに対内的な意思表明でした。統治行為としてではなく、国民統合のために発信するのは、まさに現代的な元首の役割です。

ただ、それを今回の五輪でやろうとすると問題が生じます。対外的に開会を宣言すると同時に、対内的には国民の不安をくみ取り、同じ目線で発信しなければいけない。五輪による感染拡大への懸念を「拝察」させるのは、二つの役割を両立させる「裏技」だったのではないでしょうか。

今回の五輪のように人々の意見が割れている時に、どう人々の思いを代表し、国民を統合していけばいいのか。現代の元首のあり方が問われていると思います。（聞き手シニアエディター・尾沢智史）

◇

1974 年生まれ。専門は経営学、法と経済学。法人についても研究。著書に「感染症と経営」など。

今回の五輪は天皇とスポーツの関係の転換点かも　権学俊さん（立命館大学教授）

皇室が積極的にスポーツに関わり始めたのは 1920 年代です。大正デモクラシーの中で、労働運動や左翼運動が盛んになりました。そういう時代に政府は、国民を「善導」するのにスポーツを利用しようとしました。

そこで先頭に立ったのが皇族です。昭和天皇の弟の秩父宮はスキーや登山を好み、スポーツ奨励の象徴的存在でした。スポーツ大会には天皇杯や皇族杯が下賜（かし）され、国民の一体感を高めました。

戦後になっても、皇室とスポーツの関係は生き残ります。昭和天皇は、戦争責任の追及を避けるために、国民に支持されていることを連合国側にアピールする必要がありました。その方法として、スポーツを利用したのです。

天皇と皇后、皇太子が戦後初めてそろって国民の前に姿を見せたのは、47 年の新憲法施行記念都民体育大会です。新しい皇室像をアピールするのにスポーツ大会は最適な場で、天皇はその後、国民体育大会に必ず出席するようになりました。

64 年の東京五輪で、注目すべきなのは聖火リレーです。占領下の沖縄に到着した聖火は、4 コースに分かれて全都道府県を通り、皇居前での「集火式」で一つにまとめられました。出発点が沖縄で、集約点が皇居ということに、政治的な意図が明確に表れています。

今回の東京五輪も、令和時代の幕開けをアピールする重要な機会と位置づけられていたのでしょう。しかし、無観客という国民不在の五輪になってしまった。天皇が五輪に積極的に関わるように見えると、批判が天皇制自体に向けられる恐れさえあります。

宮内庁長官の発言は、絶妙なタイミングだったと思います。天皇は、2020 年の誕生日の会見では東京五輪・パラリンピックへの期待を語りましたが、21 年の会見ではまったく触れていません。五輪については沈黙を続けていました。

しかし、五輪開催をめぐって国民の意見が二分されている中で、**開催前に何らかの意見を表明する必要を感じていたはず**です。G7 サミット（主要 7 カ国首脳会議）で菅義偉首相が各国首脳から開催への支持を取りつけた直後で、開催の約 1 カ月前という早すぎも遅すぎもしないタイミングをとらえて、長官の口を借りてメッセージを出したのだとみています。

今回の長官発言は、天皇の政治的行為につながりかねません。そのリスクを冒したのは、天皇が意思を何も示さないまま開会式に出席するのは、象徴天皇制に悪影響を及ぼすという危惧があったからでしょう。**今回の五輪は、天皇とスポーツの関係の転換点に**なるかもしれません。（聞き手　シニアエディター・尾沢智史）

◇

1972 年韓国生まれ。専門は歴史社会学、スポーツ政策論。著書に「スポーツとナショナリズムの歴史社会学」。

「統合」のありよう、私たちが議論して作るもの　赤坂真理さん（作家）

宮内庁長官は今回、自分自身の「拝察」であると断りつつも、五輪を開催することが新型コロナウイルスの感染拡大につながらないかを天皇陛下が懸念している、と印象づける発言をしました。そのニュースを知って私は、賛成でも反対でもない、複雑で不思議な感想を抱きました。

私はこの間、周りの人々が「五輪を開催するのはやめてほしいと天皇が言ってくれないかなあ」と言うのを何度か聞いてきました。皇室に普段から関心を持っている人たちには見えず、危機にあって天皇という存在が思い出されたのだろうと思いました。

平成期の 2016 年にビデオメッセージで語られた「お言葉」の記憶があり、「先代の時も、退位の制度がないと心配ですと天皇が言ったら制度が変わったし」という感覚なのでしょう。あいまいな形で事態を収めてしまう力。天皇にはそれがあると、彼らは考えているようです。

ただそこには、責任回避の問題も見えます。**国民が自らの責任で事態を変えるのではなく天皇の「収める力」に頼ってしまう問題と、天皇が何をしたのかが不明瞭な形で天皇の持つ力が発揮されてしまう問題です。**もやっとした国民の願望をもやっとした形ですくい上げる天皇がいて、仮に天皇の行為が裏目に出ても天皇の責任は問わない国民が他方にいる。不思議な了解が今でもあるように思います。

制度のように見える天皇が実は生身の人間であり、だから頼られも利用されもするという点は、戦前とあまり変わっていないかもしれません。

五輪と天皇の関係を考える時、**島根県知事による先日の問題提起**は興味深いと思いました。開催のあり方をめぐり国論が二分されている状況で陛下に開会式への出席をお願いしてよいのか、と知事は訴えました。「分裂」がむき出しになっている場所に「国民統合の象徴」を立たせてよいのかという問いでしょう。

開会式で天皇陛下が開会宣言をしたら、一定数の国民が「本当は開催したくないのでは？」と想像する。そういう状況が、「拝察」発言で確かに生じました。本当に開会宣言が定型通りに行われるのか、と疑問すら感じます。

ただ、分裂の表れている場所に統合の象徴を立たせてはいけないと決めつけてしまう前に、議論をしてみたほうがいいとも思います。「内部に分裂がある=統合されていない」という話では必ずしもないはずだと思うからです。

国論は分裂しているけれど、分裂のある国としてまとまっている。そんな統合のありようを探っていく方向もあるはずです。天皇が象徴するとされる統合とは何なのか。その答えを私たちは、議論を通じて、自らの責任で作っていくべきです。（聞き手　編集委員・塩倉裕）

◇

小説や論考を通じて天皇という存在に向きあってきた。小説「東京プリズン」「箱の中の天皇」など。